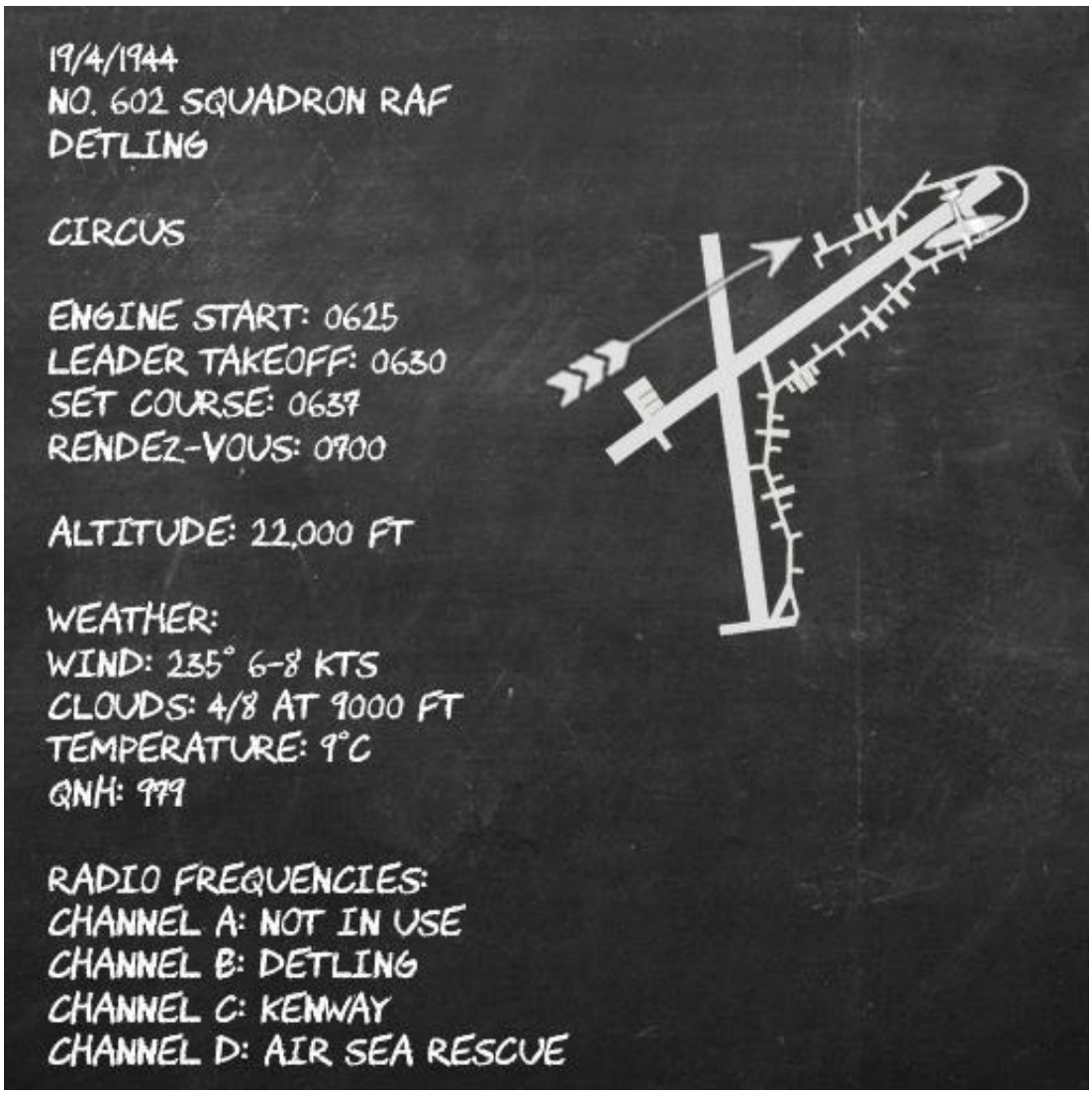
ブリーフィング

Good morning gentlemen,

第 602 飛行中隊は、アメリカのフライング・フォートレスがマーシャリングヤードを攻撃するルーアンへの空襲に密着した護衛を要請された。第 602 飛行中隊、コールサイン「マックス」は 0625 時にエンジンを始動し、ブルー、イエロー編隊に続いて 0630 時に離陸する予定である。飛行場上空で隊列を整え、0637 時に進撃せよ。フェカンの北で 0700 時に爆撃隊と合流する。作戦間はチャンネル C でケンウェイが敵の航空活動を逐一報告する。いつも通り、無線封止厳命する。海岸に戻れない場合は、チャンネル D で「メーデー」を呼び出した後に脱出せよ。ポケットの中身を空にしろ。幸運を祈る。

作戦詳細

このミッションは、「不愉快な事件（An unsavoury incident）」の章を再現しています。クロステルマンは 1944 年 4 月後半に起こったというだけで、詳しいことにはあまり触れていません。この時期に米軍がルーアンを攻撃したことを示す資料は見つかりませんでしたが、4 月 18 日から 19 日の夜にかけて RAF の夜間爆撃があったことがわかったので、家屋がまだ燃えている翌朝にミッションを設定しました。実際の状況とは異なるかもしれませんが、記述に沿って作成しました。フランスの都市を破壊し、同胞を殺しているのが連合軍の爆撃機であり、その爆撃機を護衛するフランス人にとってはとても辛い体験だったことでしょう。あなたはピエール・クロステルマンとなり、第 602 飛行中隊の 12 機のスピットファイアを率いるマックス・レッド・リーダーとして飛行することになります。エンジンをかけ、チャンネル B で管制塔に連絡し、滑走路 23 に移動します。レッド編隊は 0630 時に離陸、その後ブルー、イエロー編隊が続きます。離陸後、チャンネル C に切り替え、飛行場を一周して飛行隊が編隊を組んだ後、0637 時に合流地点に向かいます。爆撃機の編隊を護衛しながら、ケンウェイの指示に従ってください。F10 ラジオ・メニューで他のフライトに命令を出すことができます。もしあなたの PC スペックが足りないようなら、同じ F10 ラジオ・メニューから、AI ユニットを減らすことができます。このオプションは 5 分後に削除されます。



背　景

1944 年 4 月 18 日から 19 日にかけてのルーアン空襲は、特に破壊的でした。この爆撃は、RAF 第 514 飛行中隊の 16 機のデ・ハビランド・モスキート双発爆撃機がソットゥヴィル鉄道基地に信号弾をマーキングするところから始まった。モスキートの後方、1 万～1 万 5 千フィートで飛行する 1524 トンの爆弾を積んだ 273 機のアブロ・ランカスター爆撃機が続いていたのです。

最初の爆撃で鉄道操車場の中心部に命中し、跡形もなくなりましたが、第二撃は大きく外れ、ソットゥヴィルの住宅地やルーアンの中心部を破壊しました。ソットゥヴィル操車場から数キロのところにある壮大なノートルダム大聖堂は、9 発の爆弾を受けて南側に大きな被害を受け、ステンドグラスの「バラ窓」2 枚が吹き飛び、かつてこの建物を世界一高くしていた高さ 500 フィートの鋳鉄製サン・ロマン尖塔もひどく損傷を受けました。大聖堂から数ブロック離れたところにある、フランス最大のゴシック様式の市民会館である司法宮殿にも爆弾が落ち、火災が発生して内部が壊滅状態になりました。水道管は破裂し、消防士たちはなすすべもなく、ただ見ているしかありませんでした。住宅も倒壊しました。ある歴史家は「炎は古い木造家屋を消化した」と記し、ルーアンとソットゥヴィルではこの夜、約 900 人の市民が命を落とし、2,200 以上の建物が破壊されたといわれています。

英国空軍の乗組員による事後報告では、「天候は少量の霞を伴い良好であった。PFF マーカー（ターゲット・インジケータ）はやや散乱していた。鉄道操車場からの火災と煙はクルーによって確認された。目標上空ではほとんど反撃はなかった…鉄道インフラに広範な損害を与え、航空機の損失もなく、爆撃機軍団の作戦は成功である。」

ルーアンとソットゥヴィルにおけるドイツ側の損害がどの程度であったかは定かではありませんが、この爆撃でフランス市民の士気は著しく低下しました。結局、フランスをドイツの占領から解放するために間もなく侵攻を開始する連合国軍が、フランスで最も貴重な歴史的都市の一つで、殺戮と破壊を引き起こしたのでした。

アメリカやイギリスのマスコミは、民衆やインフラへの爆撃の影響は最小限に抑えたと報じましたが、アイゼンハワーのもとには、文明人が無謀な破壊に激昂しているとの報告が届いていました。しかし、4 月 18 日から 19 日にかけてのルーアンの惨状もさることながら、さらに悪いことが待っていました。(warfarehistorynetwork.com)